



國家圖書館 編

東亞同文書院 中國調查手稿叢刊

68

國家圖書館出版社

六月四日

六月三日



國家圖書館編

東亞同文書院
中國調查手稿叢刊

68

國家圖書館出版社

第六八冊目錄

昭和十七年（一九四二）旅行日誌（第三十九期生）

奥田隆春	第一班		一
高橋昇治	第一班		四三
黒木正吉	第一班		六三
佐藤泰司	第二班		九一
高田宣夫	第二班		一二一
大島新吾	第二班		一五一
坂下雅章	第二班		一六七
松原一夫	第三班		一九五
野村智一	第三班		二四一
齋藤博	第三班		二八三
瀧澤哲雄	第三班		三三五

秋元伸一	第四班		三六七
吉田倬三	第四班		四〇一
大江勝	第四班		四二九
中村輝美	第四班		四六三
山田尚	第五班		四九七
高橋嘉夫	第五班		五三七
永井康吉	第五班		五八七
石橋申雄	第五班		六四一

昭和十七年度

大旅行日誌

第一班

奥田隆春

日記

蒙疆調查第一班

奥田隆春

東亞同文書院大學學生調查大旅行指導室

愈	長	江	を	出	る。	海	の	水	は	色	を	愛	つ	ふ	い	下	黄	色	を	呈	し	て		
き	を	始	め	た。	中	々	と	う	し	て	盛	ん	ふ	も	の	下	あ	る。						
る	と	あ	う	う	下	は	ト	う	レ	下	こ	う	う	下	は	回	基	將	棋	と	退	屈	し	の
の	下	外	に	搜	し	て	も	余	り	居	る	も	ふ	い。	我	々	は	夫	座	を	占	め		
る。	日	本	人	は	と	言	へ	ば	五	十	名	許	り	の	我	々	書	院	生	位	の	ふ	も	
室	に	這	入	つ	て	見	廻	は	せ	ば	三	等	船	客	の	大	部	分	は	支	那	人	の	あ
つ	て	船	は	静	か	に	碼	頭	を	離	れ	た。	上	海	よ	さ	ら	は	つ	あ	る。	船		
船	は	小	さ	か	つ	た。	見	送	り	も	少	ふ	か	つ	た。	ト	う	か	鳴	り	終			
の	爽	々	か	ふ	風	氣	を	胸	に	吸	つ	て	實	に	好	い	氣	持	に	ふ	る。			
起	床	す	る。	東	の	空	が	明	く	ふ	う	て	空	は	よく	晴	て	ゐ	る。	朝				

あ	ぬ
血	る
潮	今
を	に
踏	久
ら	し
せ	ぶ
る	ワ
。	下
	青
	い
	海
	が
	見
	ら
	れ
	る
	と
	わ
	ふ
	期
	待
	に
	胸

海は平穩である。
我如無敵海軍の嚴格な戒武の存する。

と
こ
ろ
こ
水
が
大東亜戦争を遂行して、ある國の船の旅と

は	
国	
は	
水	
赤	
リ	0
船	
は	
青	
島	
丸	
フ	
あ	
フ	
右	

六月六日
曇後晴
土曜日

昨夜は實に良くと睡れた
今日、
金魚、青島た、
鳥た、鳥た、
と

音の聲も聞えり
始めて鬼を河北山東地を左から右

へ
つ
ー
フ
と
見
渡
し
た^o

こ
水
で
愈
例
の
黄
色
ふ
き
じ
混
入
の
飯

と
も
別
水
に
あ
り。
一
時
半
赤
い
塵
根
と
録
の
山
と
高
い
敬
会

の塔のまゝ美しい日本の風景にも似た青島の港に入港し
 た。
 街はほこりっぽかつた。黄沙の眼に這入つてぐり／＼
 と痛む。こんふぽこりぽは青島も大衆である。先輩の方
 々の御世話により海事協会に泊りて戴く。日本の宿も取
 つた旅のあり大旅行らしくふいとと思つたが、これに今夜
 は自分らの宿を尋ずる話もいらふ、われ／＼とふふ氣に
 なる。大崎より青島の先輩の方々に我々の方々に歓迎会を
 開いて下さるとある事である。それ迄に暫く休んで先づ市
 内見物に出掛けた。旅車での服装の綺麗ぶりと市街に坂

の多いのか、眼に着く。商店に買物に行つて見ると日本語の話せる支那人が多い、流石早くから日本と接觸して關系の深かつた地である。市街の椰子も支那人の態度も氣持のいいところである。歓迎会の席で先輩の即話を伺へば青島の支那人は一般に日本人に對して好感を拂つてゐるとの事、又青島には雲南省あたりに移住したものが、多いので青島語は北京語とは違つてゐるところが多いのか、ともかくある。

歓迎会終了の後直ぐ宿に歸つて一風呂浴びる。床をとなつてある部屋に歸つて見るとまゝに中学校の修学旅行の

の標に足踏み場もあひ標亦有標ひある。これか青島	／後ひある。	六月七日	晴	日曜日	市内見物に出掛けようと思つた。二三人は夫行	くと。了あると云つて出掛けろあひ一語に出掛けろ標	あ友達を捜す。縣人の高橋君と唐川君とあ三人とも知り	合も何もあひし班員は別々に出掛けろ事にあつてゐると	云ふ。あひ丁度幸ひと三人で青島の市内見物にかゝり縣人	り先輩を訪ねることにする。時分を見はからひ十時頃か	ら出掛けろ原先輩を伴ひ訪ねる。折上り即在宛ひあつて
-------------------------	--------	------	---	-----	-----------------------	--------------------------	---------------------------	---------------------------	----------------------------	---------------------------	---------------------------

のり色に即話も伺ひ又上海や書院の探子を知らせする
 〇夕食を即馳走しようといふといふ所の見物の帰り
 に又一度即寄りするにとしして忠海海岸跑馬場の方向へ
 出掛ける。今日は雲一つない探子好り天気なりと
 照りつける。金中支那の町を見つて暫く休息する。
 この支那人の言葉は割合によくなかつた気分が良かつ
 た。海濱公園の前で洋車を下りる。ふろく歩くと水族
 館物産館をのりて見る。海は静かた海岸の赤黄色の岩
 や砂の探子があり松と調和して何ともよい好い風色
 である。自今にはこの景色は瀬戸内海から来たもの探

に思はれむ。海水浴場には一年ぶりにボートを漕ぎて遊
人。第一公園の眺望の眺めは上海にも二の称不場
所。飲しいものたとの威を深くさせた。

十時三十分先輩宅を辞して海軍協会へ歸了。

八月八日

晴

月曜日

今日は唐川君と自分との二人だけ外出する事になつ
た。ツリストが大同行のキツクを買ふ。二人とも今日
は別に二枚と云つて見物する。と云ふも余りおもしろい。自金
の金融調査に唐川君が一語に來て呉れた事にふる。朝鮮
銀行の中京先輩の紹介を戴き市内の大正銀行聯合準備